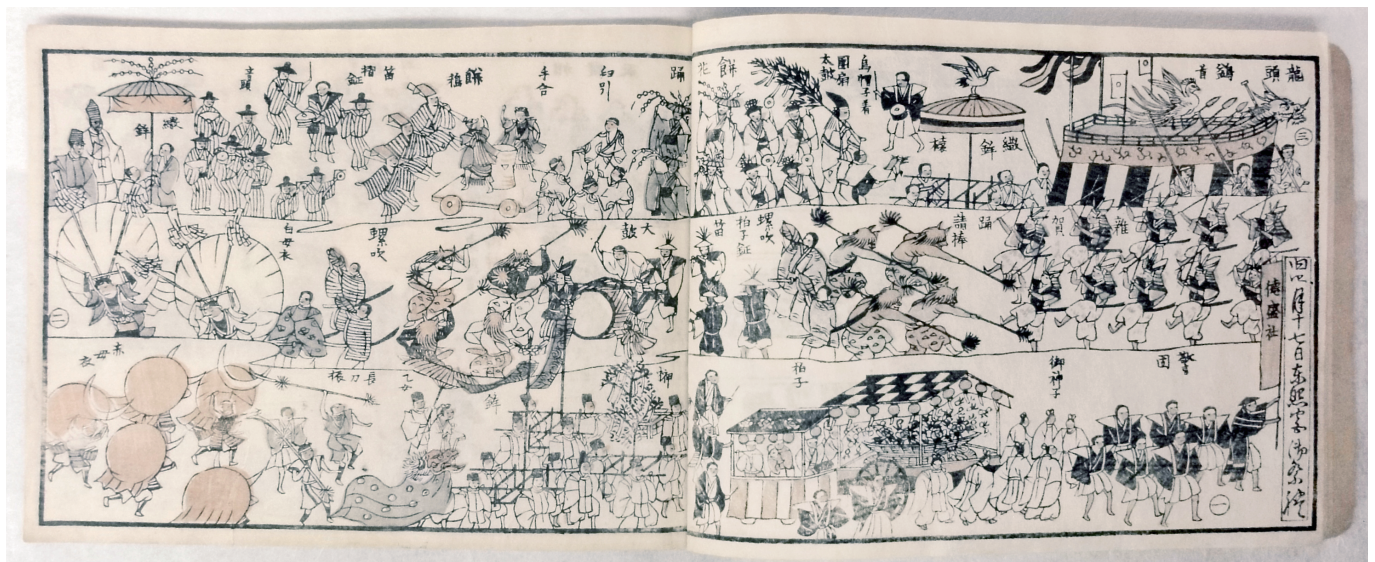
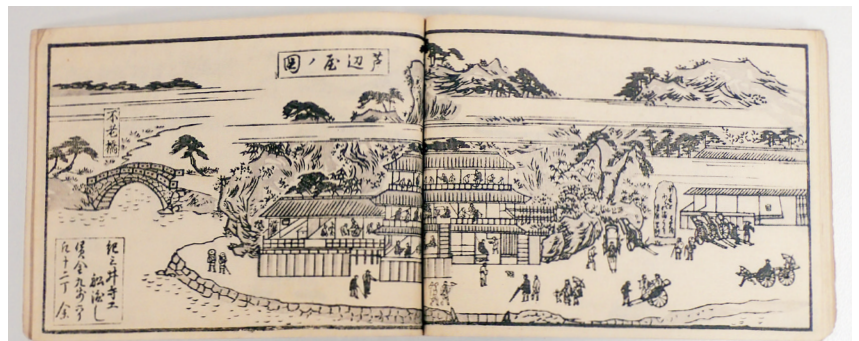
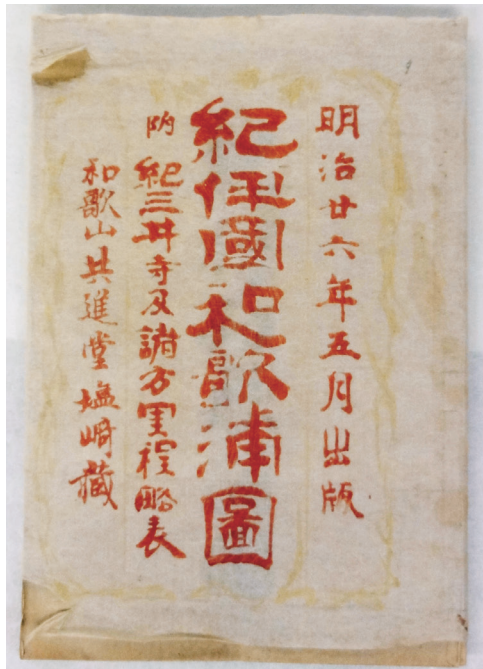


# き の み な と



## 資料紹介 紀伊国和歌浦図

明治26年[1893]5月 版本色刷 本紙11.7×17.0㎝ 紀州経済史文化史研究所蔵

和歌浦のあしべ屋旅館が出版した和歌の浦のガイドブックともいえる和綴の冊子にあたります。あしべ屋は妹背山にかけられた三断橋前に本館を構えていた旅館で、南方熊楠が明治34年[1901]に孫文とこの旅館で再会し、旧交を深め、また夏目漱石が明治44年[1911]に妹背山にある当旅館の別荘を予約するなど、多くの文化人が滞在する場となっていました。

本書では各項目でタイトルがつけられ、和歌の浦の名所が詳細に描かれています。とくに「和歌浦全図」の項目では「芦辺や汐場」、また巻頭の項目では「和歌浦海水浴」と記され、当時の和歌の浦が明治期に海水浴で賑わっていたことがわかります。また、和歌祭のようすも「旧四月十七日東照宮御祭礼」として描かれており、明治18年[1885]に旧藩士が和歌祭を支援するために結成した徳盛社の幟が先頭に立った和歌祭の渡御行列のようすも描かれています。(吉村旭輝)



## 庭園観光とイタリアの庭園

小野健吉／庭園史(和歌山大学 観光学部)

日本庭園史の研究を始めた40年近く前から取り組んでいるのは庭園の形態(デザイン)と機能(使われ方)だが、7・8年前から観光資源としての庭園あるいは庭園観光に興味を持つようになった。庭園の使われ方の歴史を見ていくと、江戸時代以降の日本では庭園は観光の対象となっていたからだ。

観光の在り方は近年多様化し、ニューツーリズムと言われる従来になかった観光も盛んになっているが、自然と文化が観光目的のなかで重要な位置を占めることは依然変わらない。時代と風土のなかで紡がれる文化の結実である庭園は、文化観光資源でありつつ、植物などを重要な構成要素とする自然観光資源的側面も持つ。

観光学においても、観光のカテゴリーに庭園観光(Garden Tourism)が位置付けられている。世界的に見ると、庭園観光の対象は3タイプに分けられる。歴史的な庭園・公園、公衆に開かれた個人庭園、園芸博等の庭園・園芸系のイベントだ。その中でも、全体的に見て観光対象として最も大きな位置を占めるのは歴史的な庭園・公園である。

日本でも、桂離宮・金閣寺・龍安寺などの京都の庭園をはじめ、兼六園・栗林公園といった江戸時代の大庭園などがすぐ頭に浮かぶ。海外に目を向けると、フランスのヴェルサイユ、スペインのアルハンブラ、中国の蘇州園林などが観光者に人気を集める庭園として知られる。しかし、全土にわたって観光資源となる造形性豊かな庭園があるのは、日本以外では英国とイタリアだけなのだ。英国とイタリアを比べると、英国では概ね18世紀以降に貴族や郷紳が自らの領地などに造営した英国式とも言われる風景式庭園が大半であるのに対し、長い歴史を持ち地形的にも多様なイタリアでは古代ローマに遡る遺跡庭園からルネサンス・マニエリスム期の露壇式庭園さらにその後続くバロック庭園や風景式庭園まで多彩だ。その意味で、庭園観光を考えるうえで最も興味深い国はイタリアだと思う。ここでは、私が観光者として実際に訪れたいいくつかのイタリアの庭園を簡単に紹介したい。

ヴィラ・アドリアーナは、ローマの東郊ティボリに遺る古代庭園だ。その名の通り、古代ローマのハドリアヌス帝が2世紀に造営した別荘で、エジプトの都市の



ヴィラ・アドリアーナ



ヴィラ・デステ



パルコ・デイ・モストリ



イゾラ・ベッラ

イメージで造ったカノプスをはじめ当時の帝国の版図をイメージした区画からなる。同じティボリにあるヴィラ・デステは傾斜地の地形を利用して16世紀に造営された貴族の別荘。傾斜地に連続的にテラスを設ける露壇式庭園は、見事な噴水群から「世界一の水の庭園」と称される。

ローマの北方バニャイアにあるヴィラ・ランテも16世紀の名園として著名で、高低差のある敷地に意匠を凝らした噴水やカスケードが展開する。バニャイアからほど近いボマルツォのパルコ・デイ・モストリも16世紀の造営で、奇妙な石造彫刻が園路に沿って配置される他に類を見ない庭園だ。

ルネッサンスの発祥地・フィレンツェでは、市街地にある有名な露壇式庭園のボボリ園のほか、近郊のヴィラ・ペトライアやヴィラ・カステッロといったメディチ家関連の別荘の眺望も加味した露壇庭園が見逃せない。

北部では、イゾラ・ベッラが必見だ。17世紀にボッロメオ家がマジョーレ湖に浮かぶ島全体を宮殿としたもので、宮殿に付随する階段状のバロック庭園は来訪者に別世界の感を抱かせる。また、南部のカゼルタにあるカゼルタ宮殿は、フランスのヴェルサイユをモデルとした庭園が広がるが、その地形からヴェルサイユとは逆に水路が丘陵から宮殿に向かう構成が面白い。

このほかにも、発掘されたポンペイに遺る古代ローマの住宅庭園、ローマ近郊フラスカティにあるヴィラ・アルドブランディーニを始めとした庭園群、ヴェネツィア近郊ストラのヴィラ・ピザーニ、ミラノのブッブリチ公園など、訪れるに値する庭園が全土に見られる。

イタリアを訪れる機会があれば、ぜひ庭園観光を楽しんでいただきたいと思う。



## 2つのフィールドワーク

遠藤 史／言語学(和歌山大学 経済学部)

和歌山大学に赴任して以来、東シベリアの少数言語の一つ、ユカギール語を研究し続けている。このような、文献資料に恵まれているとは言えない分野に関わるからには、フィールドワークを行うことは必要でもあり、また夢でもあった。

とはいえ、その夢は簡単には実現してくれそうになかった。研究を始めた頃にはまだソビエト連邦が存在しており、外国人がシベリアの片隅に出入りすることなど許されるとは思えない。とりあえずソ連の研究者による論文や本を入手し、虚心坦懐に分析するところから始めたが、データを自ら収集したいという思いは募った。

転機が訪れたのは、やはり1991年末のソビエト連邦の崩壊であっただろう。国内混乱のニュースはまだ続いていたが、シベリアに入れた外国人研究者の話もちろはと聞こえてくるようになっていた。科研のチームに加えていただくことができたので、旅の計画を立ててみると、意外にも手続きは進み、現地まで到達できた。1995年の夏のことである。通過していく街にはどこことなく不穏な空気が漂い、店に入ると棚はガランとしていた。

この第1回目のフィールドワークは1ヶ月半を超えた。かくも長い期間の不在を許してくれた当時の大学に感謝は尽きない。真夏の和歌山からすれば、現地は避暑を通り越して寒さを感じるほどの気候。セーターを着込んで毎朝、コリマ・ユカギール語を話すおじいさん(引退したハンター)の住む家に通い、基礎語彙を尋ねてはノートに書き取る。発音を確かめつつゆっくりと進んで二週間が過ぎる頃には、ロシア語も少しずつ使えるようになり、ホームステイさせてもらっていた村長さんの家族ともどうやら話が成立するようになっていた。

夏を利用して同様のフィールドワークを重ねること3回。その後も現地を訪れる機会は何度かあったが、第一印象の鮮烈さも手伝って、やはりこの初期の経験は格別だ。文法の分析を進め、原語での民話を聴いて理解できるレベルまで到達した嬉しさもあったし、現地に漂う不思議な開放感も心地よかった。

実際、それは不思議な時代だった。政治的にはエリツィン



現地の村の風景(晴れ渡った夏の朝)

政権の末期で、経済状況は混迷を深めていたが、現物経済中心のシベリアの村にその影響は薄く、流入してくる「外来文化」に人々の関心は向いていた。夕食後に皆でリビング・ルームに集まって、何回もダビングを重ねたと思しきディズニー映画の『ライオン・キング』をビデオで見る。『リバー・ランズ・スルー・イット』を初めて見たのもここだ。男たちの興味はブラッド・ピットの演技よりも、フライ・フィッシングの手さばきに集まった。何しろほとんど毎日、川で釣った魚を食べて暮らしている漁撈の達人たちである。外は白夜、遊び続ける子どもたちの声がいつまでも響いていた。

そのざわめきは遠く過ぎ去り、すっかり忙しくなった大学で、長いフィールドワークは再び夢物語となった。今の自分が取り組んでいるのはいわば第2のフィールドワークで、帝政ロシア時代に民族学者が収集した民話資料を読み、分析を進めている。今から120年以上前の、まだ電気も水道も、集中暖房の設備もない時代の、やや古いコリマ・ユカギール語で語られた物語たちをゆっくり読んでいくと、ロシア人進出以前のシベリアの声が聞こえてくる。その声が語る世界の中で、月は無慈悲に人々を殺め、野ウサギは老女をたぶらかし、ワタリガラスとライチョウは競い合う。

無文字社会だったユカギールの歴史を古くまで文献的にたどることは困難だが、ここから先は、第1のフィールドワークで出会った人々や風景を心に浮かべてみることにしよう。広大な森と、その中を蛇行する川、様々な種類のベリーの茂み、そのほとりに隠れるようにある小さな小屋。勝手な空想にひたつたまま時間が経ち、民話資料からふと目をあげてみれば、外には夕闇が迫り、研究室の窓から見える紀淡海峡はいつものようにそこにあった。

## 延慶本『平家物語』と紀州地域

大橋直義／日本中世文学・文献学(和歌山大学 教育学部)

**延慶本『平家物語』** 数多ある『平家物語』諸本の中でも、とりわけ光彩を放つ一本がある。延慶二・三年[1309~10]本奥

書、応永二十六・七年[1419~20]書写奥書を有する延慶本である。現在、大東急記念文庫に重要文化財として蔵さ



れるこの六巻十二帖本は、水原一『延慶本平家物語論考』（加藤中道館、1979）による検証以後、いわゆる「平家物語古態論」の中心であり続けてきた、研究史上、最重要の一本である。現在の研究水準では、その当時に考えられてきた程には鎌倉後期頃の本文を伝えているとは言えず、現存本が書写された応永年間頃の再編を被っていることが明らかである。しかし、それでもその文学史的価値はいささかも揺らぐものではなく、中世文学研究および日本語学に果たす役割はもちろん、歴史学を始めとした隣接分野においても重要な位置を占めている。それゆえ、幾度となく影印版・活字版が刊行され、昨年2019年3月には、延慶本平家物語注釈の会編『延慶本平家物語全注釈』全12巻が完結した（汲古書院。現在、論考・注釈補訂を集成した「別巻」を準備中）。



根来寺 大塔(左)と大伝法堂[2017年 稿者撮影]

しかのみならず、紀伊半島の地域史にとって極めて重要なことは、延慶書写・応永書写のいずれの段階においても、根来寺（岩出市）において書写されたことが明らかな点である。周知のように、新義真言教学の根本道場である根来寺は、天正十三年〔1585〕三月、本堂・大塔等の主要伽藍を残して灰燼に帰した。その中にあって、幸いにも延慶本は、それ以前に寺外（おそらくは室町殿）にもたらされ、難を逃れたのである。

**根来寺研究** 延慶本の本文には、他本には見られない特異な一面をかいま見ることができる。牧野和夫は「延慶本『平家物語』の一側面」（『藝文研究』36,1977、『延慶本『平家物語』の説話と学問』思文閣出版、2005再録）以後、根来寺と高野山大伝法院とをとりまく人的ネットワークの中に延慶本テキストの生成を見、その生成環境は、中川委紀子・宇都宮啓吾・三好英樹ら始めとした美術史学・日本語学・歴史学からの成果によって、広くかつ稠密に見わたされ続けている。根来寺は、日本中世を理解する上で重要な学術的結節点なのである。その近年における成果として、たとえば2013年12月に和歌山大学で開催された説話文学学会シンポジウム「〈根来寺〉の輪郭—空間・資料・人—」での一連の論考（『説話文学研究』50,2015）を始め、海津一郎編『中世都市根来寺と紀州惣国』（同成社、2013）、大橋直義編『根来寺と延慶本『平家物語』—紀州地域の寺院空間と書物・言説—』（勉誠出版、

2017。右下図版）、山岸常人編『歴史のなかの根来寺—教学継承と聖俗連環の場合—』（勉誠出版、2017）等の学術書が相次いで刊行されている。永村眞「中世根来寺の法儀と聖教」（『中世文学』63,2018）、三好英樹「中世後期根来寺内における修験道」（『智山学報』60,2011）を始めPDFファイルとしてウェブ公開されている関連論考も多いが、中川委紀子『根来寺を解く—密教文化伝承の実像—』（朝日選書、2014）を初学者がまず参照すべき基本書籍として紹介しておきたい。



**粉河寺と葛城修験** 延慶本『平家物語』における独自記事の中でもとりわけ注意を払いたいのが第五末（第十帖）・十五「惟盛粉河へ詣給事」である。屋島内裏を落ちた平維盛が高野山から熊野へ向かう途上、粉河寺に立ち寄り、寺内を巡礼したとする独自説話である。先年、この記事に関連しうる資料として粉河寺御池坊蔵『粉河寺御池海岸院本尊縁起絵巻』二巻二軸（〔18世紀〕写。『紀州経済史文化史研究所紀要』39,2018）を紹介したが、その解題において粗々の見通しを示したように、南北朝期から15世紀初頭にかけての時期、御池坊が粉河寺の寺家執行・頭坊を独占的に継承し始めるに際して生じてきた言説が、現存延慶本（応永書写本）とこの絵巻に共通して示されている点、興味深いのである。なお、有田川町日光神社社頭を描いた「日光社参詣曼荼羅」は平維盛が境内を巡礼する様を描くという点で共通する。

延慶本『平家物語』と粉河寺との連なりを示すものとして、（鎌倉初期）写『諸山縁起』『転法輪山（字葛木峯）宿次第』がある。そこには、「石曳 瀧院」と根来寺の前身である覚鑑再建「豊福寺」とが連続して示され、そしてその「葛城二十八宿」の道は粉河寺へと連なるものと位置づけられる。この状況は、延慶本第六帖・延慶二年本奥書が「紀州那賀郡根来寺石曳院之内禅定院之住坊」を書写の場と明示していることと関わるのだが、これまでの研究史は、根来寺・石曳院と葛城修験との関わりを重く見過ぎて来はしなかったか。葛城二十八宿との関わりからすれば、「葛城の中台」として最も大きな位置を占める中津川行者堂（極楽寺）と粉河寺との連なり、そして粉河寺と興国寺さらには再興期の七宝瀧寺とを繋ぐ法燈派（と修験）のネットワークの解明が、また別の糸口になると思われるのである。



## 紀伊半島における「歴史」の創作

**創られる歴史** 今回の企画展は、教育学部共同事業の連携学校歴史教員と相談し、教員採用試験(社会・地歴)対策の一環として実施した。2月15日の教育学部研究集会では、コロナ騒動下に関わらず、200人近い県・市教育委員会関係者の参加を得て成果を披露することができた。その点で、今後の歴史教育行政の前進にとって意義あるものだったと考える。

さて、掲載写真は**伊太祁曽神社の社頭参道脇にある終末期古墳**である。江戸時代後期の地誌である紀伊名所図会の境内図には「岩戸」と記されていた。中世の代、山東盆地一帯は根来寺勢力の支配する荘園・山東荘であり、伊太祁曽神社はその一宮に祀り上げられていた。この時に根来寺は、神社の祭神を天手力男命に改めた。木の神・五十嵐命を主神とする現代の観光マインドは近世以後の「新しい伝統」なのだ。天照大神を救助(拉致)した「天の岩戸」こそは、中世の伊太祁曽神社にとって神威を演出する舞台「遺跡」に他ならない。



**「遺跡」の成立** このような歴史の創作は、中世国家の顕密体制(旧仏教勢力による学問・思想統制)に始まるものであり、紀州の場合とはくに顕著である。今回の企画展でも、中世起原の名所・旧跡は、すべてが顕密勢力に由来している。さきに根来寺勢力の山東荘・伊太祁曽神社改造の事例を出したが、覚銭率いる聖勢力こそは顕密勢力のなかでも突出した精鋭部隊だった(研究史上は禅律僧)。

今回の展示品40点のうち、23例は後世の創作であり、明恵遺跡のように同時代のものであっても捏造の役割をはたしているものもある。明恵遺跡は、国史跡に指定されているが、明恵の死後になって後継教団の一流喜海が自己に都合よい(可能な)ポイントを集めて八所遺跡として木造塔婆を立てた。「遺跡」という言葉を、特定有名人の名所・旧跡の意味で用いて、そのモニュメント自体を遺跡と広報するのは、管見の限り、この明恵遺跡が初めてではなかろうか。このきっかけとなったものは、湯浅党の本家に対して幕府から課された熊野王子の修復命令ではなかろうか。湯浅党領国では、遺跡の興行(復活)という演出が、歴史を回復するものとして民衆の支持を集めるものであることを再発見した。

**紀伊半島に「神の国」を** 有田川流域における明恵遺跡の興行運動は、蒙古襲来前後の金剛峯寺・大伝法院・覚心勢力らの神領興行を経て、ついには後醍醐天皇の討幕(神国回復)に至る。紀伊半島の神国興行の流れは、戦国時代雑賀衆・根来衆らの「紀州惣国」成立につながり、1585年の滅亡(太田水攻め)の後も長く民衆世界を呪縛し続けたのであった。(2020年3月8日)

海津一郎／日本史学(和歌山大学 教育学部)





## 第5回学長杯 カルタ大会

2月8日(土)、紀州研主催の第5回学長杯カルタ大会が教育学部L201教室で開催された。参加者は和歌山市内の小学生約35人、引率の大人40人、学生達関係者が約20人、総勢約100名。これは今年、紀州研の予算でチラシを市内の全小学校



に配布したことも一つの理由だろう。

カルタ大会は、手作り百人一首「セレクト20」(詳細は「きのみなと」秋号参照)から始まり、「わだにゃん和歌山万葉カルタ」など、和歌山大学で教材として作ったカルタを利用した。

団体戦と個人戦を実施。一試合10分、相手を次々換えながら、次第に勝者同士がトーナメントの上にあがっていく。敗者同士の対戦もおこなわれるので、「やった!」「あ〜っ、取られた!」と、広い教室に子供たちの声が響き渡る。見学の保護者たちも笑顔で見守っていた。

今年の特別なイベントとして、和太カルタ部による、「競技カルタ」のエキシビションを開催。昨今、映画「ちはやふる」で有名になった競技カルタだが、実物を見るのは初めての子供たちは、興味津々。畳ならぬマットに拡げる札の配置、取り方(飛ばし方)の実演に見入ったり、驚いたり。その後、二組に分かれて大学生に次々挑戦。保護者が取り囲んで見守る中、緊張と歓声が入り混じった楽しい時間を過ごした。「あんなに熱心に聴いてくれるなんて」とカルタ部の女子学生も興奮気味だった。



この学長杯カルタ大会、実はこんなきっかけから始まった。5年前、新しく学長に就任した瀧先生に何か和歌山らしいことをやってもらえないかと声をかけられた。聞いてみると、「和歌山ですから和歌でしょう」と、なんともシステム工学部出身の先生らしい。和歌の全国公募はどうでしょうというのを、それはちょっと、でも…と実現したのが学長杯。和歌山の子供たちに「和歌に親しんでもらう」、大学が紀州研がその一助となれば幸いです。

(菊川恵三)

## くずし字 チャレンジ!

和歌山市やその近隣の小学校高学年・中学生を対象に、「くずし字」を読めるようになって「昔の本」にチャレンジしてみよう!という出前講義を始めました。年末年始から始まったばかりのチャレンジですが、小学校・中学校あわせて2校にさっそくお邪魔をしてきました。



12月16日にうかがったのは、有田川町立吉備中学校1年生A組からE組の皆さんの教室。2月3日には和歌山大学教育学部附属小学校の56年F組(複式学級)と6年C組の教室。先生方、生徒・児童の皆さん、ありがとうございました。

「講師」になったのは、紀州研ボランティアの学生諸君。いずれも教育学部国語教育専攻の3~4回生で、教育実習はもちろん、「百人一首セレクト20」を通じて、生徒・児童の皆さんとの関係も最初から良好。今回の授業ではお伽草子『うらしま』の挿し絵に注目しながら、現代に生きる私たちが知っているものと、全然違う「浦島太郎」があったんだ!ということ学びました。ぜひこの授業を受けてみて、そしてその違いにビックリしてみてください。



ご関心をお持ちの先生方、お気軽にお問い合わせください。

(大橋直義)



紀州研  
2019年度  
展覧会報告



特別展

七宝瀧寺と志一上人  
—葛城修験二十八宿の世界—

- 会 期  
2019年10月31日(木)～12月13日(金)
- 総入場者数  
280名
- 図 録  
有(13頁・無償)
- 協 力  
七宝瀧寺・神於寺・粉河寺・釋尊寺・聖護院・禪徳寺・中津川行者堂(極楽寺)・根来寺・火走神社・宮内庁書陵部・和歌山県立博物館・歴史館いずみさの
- 企画責任・主担当  
大橋直義(紀州研 副所長)



企画展 //////////////////////////////////////

和歌の浦と和歌祭

- 会 期  
2019年  
4月9日(火)～5月31日(金)
- 総入場者数  
963名
- 図 録  
無(ただし2011年特別展  
図録を無償頒布)
- 協 力  
紀州東照宮  
和歌祭保存会
- 主担当  
吉村旭輝  
(紀州研 特任准教授)



**企画展**

紀州地域の文化財  
—館蔵品・寄託品展—

- 会 期  
2019年  
6月13日(木)～8月2日(金)
- 総入場者数  
382名
- 図 録  
無
- 主担当  
吉村旭輝  
(紀州研 特任准教授)
- 企画協力  
大橋直義  
(紀州研 副所長)



**企画展**

ぶらくりのこれまで・いま・これから  
—紀州のまち探訪—

- 会 期  
2019年8月29日(木)～10月18日(金)
- 同時開催  
かんさい大学ミュージアム  
ネットワーク連携展示  
「唐人イメージの表象と変遷—ぶらくり丁と和歌祭—」
- 総入場者数／178名
- 図 録／無
- 協 録／和歌山市商工会議  
所・和歌山市中央商店街連合会  
会・和歌山大学COC+推進室
- 主担当  
吉村旭輝(紀州研 特任准教授)



企画展 //////////////////////////////////////

紀伊半島から考える  
日本史

- 会 期  
2020年  
1月10日(木)～2月27日(木)
- 総入場者数  
70名
- 図 録  
無
- 企画責任・主担当  
海津一郎(紀州研 所員)



## information

2020年度  
企画展  
1

紀州経済史文化史研究所

和歌祭 一渡物と練物一

会 期／2020年4月7日[火]～5月29日[金]  
 会 場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所  
 展示室(和歌山大学西5号館[図書館棟]3階)  
 入 場／無料  
 開室時間／10:30～16:00  
 休 室 日／土・日・祝日・図書館休館日



和歌祭の練物(杵踊(餅搗き踊り))  
 (『WAKAMATURI NO KI』  
 (紀州経済史文化史研究所蔵 大正9年[1920])

紀州東照宮は徳川家康の十男であり、紀州徳川家初代にあたる徳川頼宣が父・家康を東照大権現として祀るために創建されました。頼宣は紀州藩主になる前は父・家康が亡くなった場所である駿府藩主であったことから、家康が死去した直後に久能山東照社の造営や久能山から日光山への家康の霊柩を遷す小祥祭にも深く関わっていました。そのことから頼宣は紀州藩入国後すぐに天海を招いて和歌の浦の地に東照社と天耀寺の造営、および祭式と法会を整えます。その際創始された和歌祭は紀州東照宮の例祭として1622年(元和8)の東照宮創建の翌年から創始されます。その際、東照大権現の神輿に付き従う渡物だけでなく、全国の東照宮祭礼では初となる和歌山城下町民による練物も登場しました。

また2020年2月9日には和歌祭四百年式年大祭実行委員会発足式が行なわれました。本展では2022年の四百年式年大祭にむけて、渡物と練物を紹介し、現行のものだけでなく、時代の変遷とともに失われた渡物と練物もあわせて公開いたします。

(主担当: 吉村旭輝)

## 2020年度 紀州経済史文化史研究所 展覧会予定

## 企画展「和歌祭一渡物と練物一」

2020年4月7日[火]～5月29日[金]

## 常設展「紀州地域の文化財一館蔵品・寄託品展一」

【第1期特集】「和歌山県師範学校郷土室の世界」

2020年6月23日[火]～7月31日[金]

【第2期特集】「大庄屋文書からみる近世」

2020年9月1日[火]～10月9日[金]

## 企画展「移民と和歌山2020:亜米利加へ、加奈陀へ(仮)」

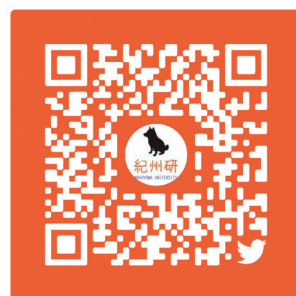
2020年10月16日[金]～11月5日[木]

## 特別展「高橋家と木ノ本村」

2020年11月17日[火]～12月18日[金]

## 企画展「岸和田の宗教文化」

2021年1月21日[木]～2月26日[金]

ぜひ  
フォローを  
お願い  
します！

紀州研Twitter